「三宅若狭家義墓」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
福岡〇三	三宅若狭家義之墓	—	—	—

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	明和九・一七七二 大正十四・一九二五	北九州市若松区本町	善念寺	

一．はじめに

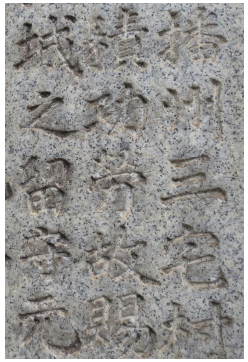
本石碑は、黒田二十四騎のひとり三宅家義の墓碑である。家義は黒田孝高に仕え、黒田若松城代となるが、元和九年にそこで没した。明和九年に、百五十回忌の記念として、その末裔が家義の墓石と墓碑銘を誌した石碑を造った。大正十四年に至り、若松市が、摩滅していた墓碑を再建し、旧碑文を再刻した。さらに昭和三十七年に、菩提寺の善念寺に移された。

墓の銘が四角柱の墓石正面に、漢文の碑文が墓石右側面に刻されている。さらに大正十四年の改築の経緯が、墓石の左側面に刻されている。そして昭和三十七年の移築の経緯が、台座正面に、左右二枚の銘板の形ではめ込まれている。

〇写真１　墓碑正面

○写真２　墓柱石正面

○写真３　墓柱石右側面と背面



○写真４「碑記」部分

○写真５　墓柱石左側面と正面

二．翻刻並に訳注

■翻刻
（墓石正面）
◎題額
三宅若狭家義之墓

（墓石右側面）

◎碑記

公姓三宅諱家義播州三宅村人也歷仕
如水公道卜公以積功勞故賜采地三千
六百石後爲若松城之留守元和九年十
月六日卒于官乃葬其地今茲明和壬辰
會百五十載之忌辰其苗裔孫供薄奠以
奉祀建石墓傍以表誌云

■訳注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎題額

三宅若狭家義之墓

◎碑記

公姓三宅、諱家義、播州三宅村人也。
歷仕如水公道卜公、以積功勞故、賜采地三千六百石。
後爲若松城之留守。
元和九年十月六日、卒于官。乃葬其地。
今茲明和壬辰、會百五十載之忌辰。
其苗裔孫、供薄奠、以奉祀。
建石墓傍以表誌云。

●訓訳

公　姓は三宅、諱は家義、播州三宅村の人なり。
如水公道卜公に歷仕し、功勞を積むを以ての故に、采地三千六百石を賜はる。
後、若松城の留守となる。
元和九年十月六日、官に卒し、乃ち其の地に葬らる。
今茲に明和壬辰、百五十載の忌辰を會す。
其の苗裔孫、薄奠を供し、以て奉祀す。
石墓を建てて傍らに表を以て誌すと云ふ。

●人物

○三宅家義　天文二十一（一五五二）年から元和九（一六二三）年*。貝原篤信「黒田家臣傳」等によれば、初名藤十郎、のち山太夫、晩年若狭と号す。父の次太夫時代から播州黒田家に仕え、藤十郎は黒田孝高のもとで武功を重ねた。孝高は、「孫子」軍争篇の「不動如山」の語から、藤十郎に山太夫の名を与えたという。孝高の豊前移封後も扈従し、朝鮮の役でも活躍したが、家臣が失火したため、恩賞は賜らなかった。慶長六（一六〇一）年の黒田家筑前入府後は、三千六百石の禄を賜り、遠賀若松城の城代として、上方口及び

豊前表の防備という大役を担った。元和九年、若松城で病没。若松の吉祥寺に葬られた。法名渓誉貞興居士。長男の忠兵衛は故あって切腹となり三宅家は断絶した。のち安政五（一八五八）年に至り、三宅家は再興となった。

＊「益軒全集」収録の「黒田家臣傳」では「元和八年」の卒としている。

○如水公　天文十五（一五四六）年から慶長九（一六〇四）年。姓は黒田、諱は孝高、通称官兵衛、号が如水軒。始め播磨小寺氏に属したが、のち中国経略中の羽柴秀吉に従う。秀吉の九州平定後、豊前国を与えられ中津城を拠点とする。家督を長子長政に譲った後も軍師として活動し、朝鮮の役、関ヶ原の役でも活躍した。のち、神格化され、現福岡市中央区西公園にある光雲神社に祀られている。

○道卜公　永禄十一（一五六八）年から元和九（一六二三）年。諱は長政、通称吉兵衛、道卜は戒名の一部。黒田孝高の嫡男。天正十七（一五八九）年、家督相続し、豊前中津城主となる。朝鮮の役でも活躍し、関ヶ原の役では東軍の主力として功績をあげ「一番の功労者」の名を得た。戦後、筑前五十二万石を拝領し、商都博多大津に隣接する地に福岡城を築城し、初代福岡藩主となった。父孝高同様、光雲神社に祀られている。

●注

○播州　播磨国。今の兵庫県南部。

○三宅村　現姫路市飾磨区三宅。

○采地三千六百石　「黒田家臣傳」によれば、慶長六年の黒田家筑前入りの後の措置。

○若松城　長政が、豊前との国境に築いた六つの端城のひとつ。洞海湾の若松側と戸畑側の間に浮かぶ中ノ島に築かれていたらしい。多くの軍船を備えていた水軍の基地でもあった。慶長二十（一六一五）年の一国一城令により廃城となる。中ノ島自体も一九四〇年に削平されて海没し、消滅した。現在の若戸大橋中央部の真下にあたり、区画としては戸畑に属した（**図1**）。

○留守　主人が外出したときに、その家を守る人。ここでは城代。

○元和九年　西暦一六二三年。

○明和壬辰　九年、西暦一七七二年。

○忌辰　忌日。命日。

○薄奠　粗末な祭り、粗末な供物。謙遜した表現。

○奉祀　祀る。

○表　碑文。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【家義公の事蹟】

家義公は、姓は三宅氏、諱は家義、播磨国三宅村の出身である。

黒田孝高如水公、長政道卜公に続けて仕え、功労を積んだことから、三千六百石の領地を賜るに至った。

さらに後には、若松城の城代という大任をつとめた。

元和九年十月六日、在官のまま没し、そのまま若松の地に葬られた。

【顕彰碑建立】

いま、明和九年、家義公の百五十回忌法要を営んだ。

その子孫達が集まり、粗末な供物を捧げてお祀りした。
そして家義公の石墓を建て、その傍らに公を顕彰する碑文を誌した石碑を造ったのである。

三．資料

（一）大正十四年墓碑再建の記録

■翻刻

（墓石左側面）

此地ハ舊若松村ノ北海岸ニシテ一團ノ墓地ナリシカ明治二十三年以來若松築港會社ノ埋築ニ因リ遂ニ市街ノ中心トナリシカハ大正六季市ハ此墓地ヲ廢シテ小山田ニ移シタリ然ルニ此墳墓ノミハ市ノ著シキ史跡ノ一ナルヲ以テ其ママ在置スルコトトシ崩壞摩滅ニ瀕シタル墓碑ヲ再建シ其舊碑文ヲ録シテ以テ世ニ傳フ

大正十四年五月　　若松市

＊異体字等
○季　年。

■訳注

●注

○北海岸　かつては、洞海湾に向かって若松側から岬が突き出していた。その岬の北側の海岸がここでいう北海岸。今は町中にある蛭子神社が海浜にあり、西北に松林が延びていた（図2）。後述するように埋め立てが進んで岬の北側は陸地化され、現在海岸線ははるか北に移っている。
○一團　団はひとかたまりになった事物を数えることば。
○明治二十三年　西暦一八九六年。
○若松築港會社　現若築建設。筑豊炭田の石炭積み出し港として、洞海湾の出口である若松に港湾を作ることが計画され、明治二十三年に若松築港会社が設立された。中心となったのは石野寛平やのちの安川財閥を作った安川敬一郎らであった。同三十年には八幡製鉄所が起工、同三十一年に若松港は開港した。そして同三十四年には製鉄所が操業を開始した。若松港は石炭積み出し港とともに、鋼の積み出し港の役割も担って発展した。その間、港湾整備のために周辺地域の埋め立てが進み、僻地であった旧北海岸は、市街地の中に飲み込まれることとなった。
○埋築　熟語はないが、埋め立て工事のことだろう。
○大正六季　季は年。大正六年は西暦一九一七年。
○小山田　現若松区深町の小字。現在小山田霊園がある。
○大正十四年　西暦一九二五年。

●口語訳

この地は旧若松村の北海岸にあたり、村の外れで、墓地があった。

それが明治二十三年の若松築港会社の創立以降、港湾建設のための埋め立て工事が進み、若松の市街地が拡充し、ついにこの地は市街地の中心に位置することになってしまった。

そこで若松市は（大正三年に市制移行）、大正六年に北海岸の墓地を廃止して、西北の小山田の地に移築した。

しかし、この「三宅若狭家義之墓」だけは、市の貴重な史跡のひとつであるとして、そのまま旧北海岸の地に据え置くこととした。ただ、墓碑は崩壊摩滅の危機に瀕していたため、新たに再建し、旧碑に誌されていた碑文についてもこれを彫り込んで記録し、後世に伝えようとするものである。

大正十四年五月

若松市

（二）昭和三十七年墓碑移築の記録

■翻刻

（台座正面右側）

高峰院溪譽貞興居士

元和九年十月六日没

（今距三百四十年前）廿一世専譽書

（台座正面左側）

この墓はもと若松市
役所の北側の地に祭られ
ていたが市総合体育館
建設のため菩提寺で
ある善念寺に移し
たのでこれを誌す
昭和三十七年四月
若松市長吉田敬太郎

■訳注

●注

○高峰院溪譽貞興居士　三宅家義の戒名。

○今距三百四十年前　この碑移築の昭和三十七（一九六二）年から家義の没年元和九（一六二三）年までは、三百三十九年である。

○吉田敬太郎　明治三十二（一八九九）年から昭和六十三（一九八八）年。侠客で政治家でもあった吉田磯吉（火野葦平『花と竜』に描かれる磯吉親分のモデル）の養子。旧制小倉中学、東京商科大学などで学び、卒業後は炭鉱経営や石油事業にも進出した。福岡県議を経て、昭和十七年に衆議院議員となる。軍部を批判したことから弾圧を受け、同二十年には実刑判決を受けて収監され、議員も失職となる。戦後はキリスト教信者となり、若松

バプテスト教会の再建とともにその牧師となる。昭和二十六年に若松市長となり、三期務め、若戸大橋建設に尽力した。一九六三年の北九州市五市合併時は市長職務執行者をつとめ、第一期市長選後政界を引退した。

四．主な参考資料

①翻刻

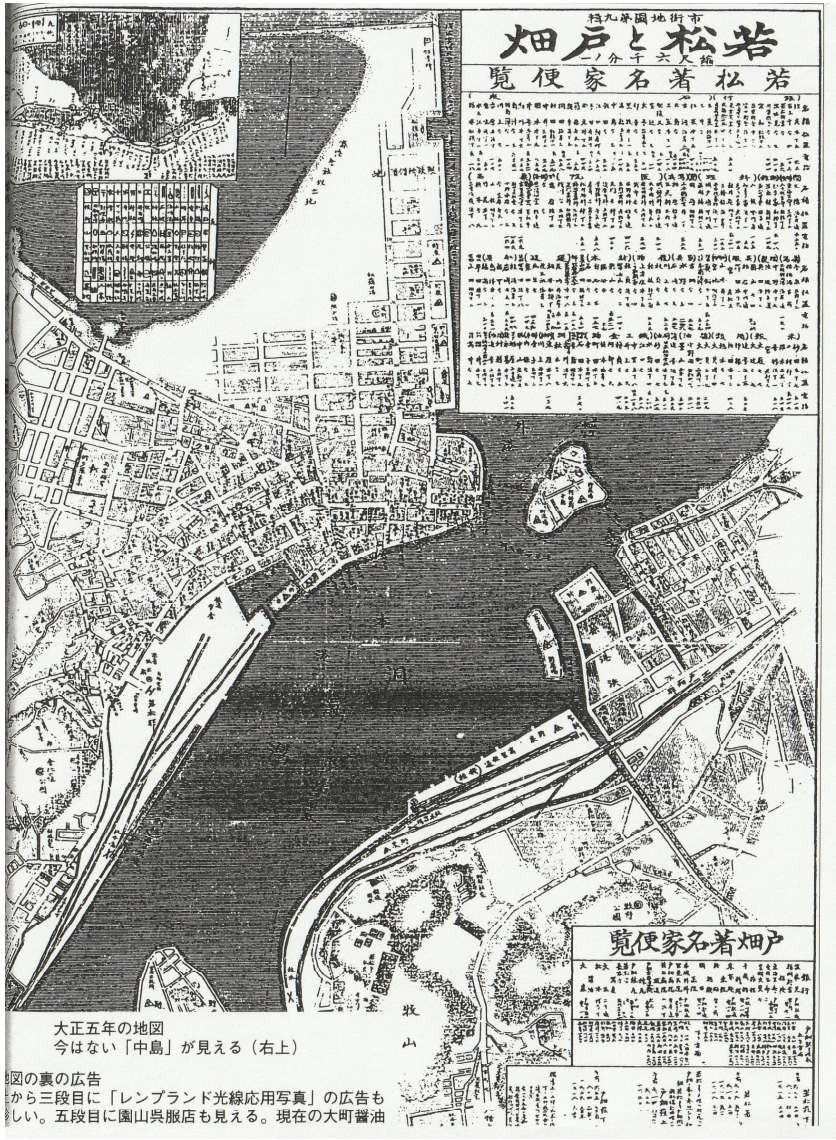
・『若松市史』（一九三七）「第十三章人物　第一節忠勇者　二　三宅若狭家義」
・『戸畑市史』（一九七四）「第九章人物三宅若狭」引「福岡縣地理全誌五十若松村」
・中村修身「北九州市の金石文集成 若松区篇」『史学論叢』（四一）二〇一一

②訓訳

・荒井周夫『福岡県碑誌』（大道学館出版部、一九二九）「忠勇篇」

③論文など

・貝原篤信「黒田家臣傳」『益軒全集』巻五所収（一九一一）
・『若松市史』（一九三七）
・『戸畑市史』（一九七四）
・『若築建設百年史』（一九九〇）
・本山一城『黒田官兵衛と二十四騎』（宮帯出版社、二〇一四）



大正五年の地図
今はない「中島」が見える（右上）
地図の裏の広告
上から三段目に「レンブランド光線応用写真」の広告も
珍しい。五段目に園山呉服店も見える。現在の大町醤油

図1　大正五年刊「若松と戸畑」地図（今はない「中ノ島」が見える）

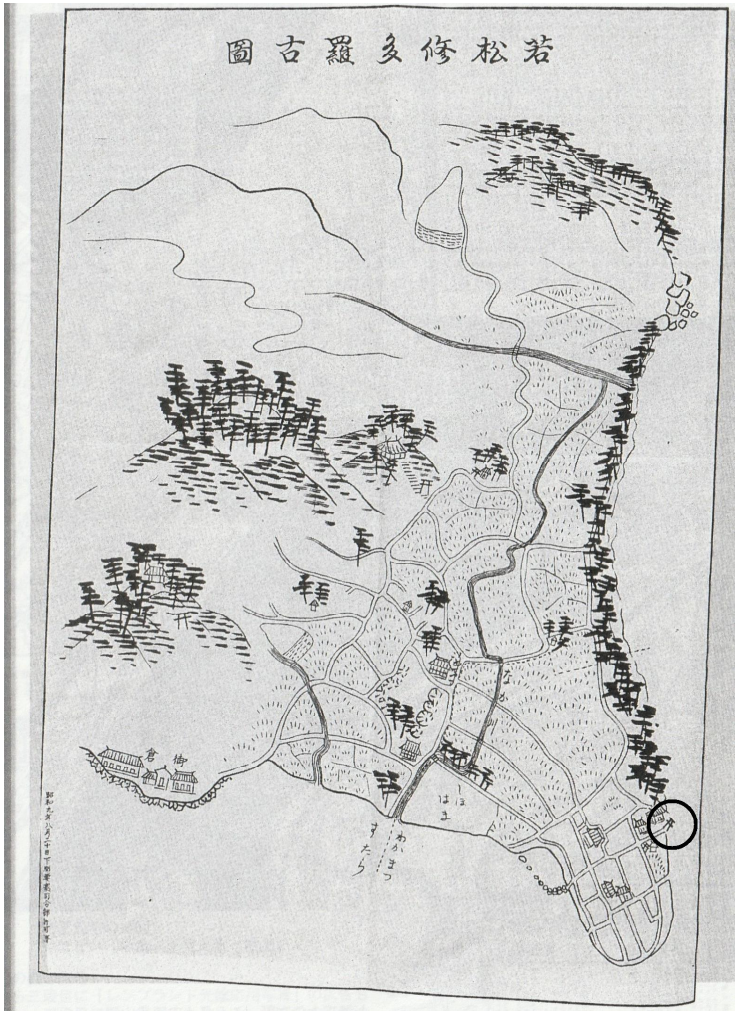


図2　「若松修多羅古図」　○印は蛭子神社、海浜にあった

図3　二〇一〇年都市図　○印は蛭子神社、町中に位置する

二〇二四年十二月　薄井俊二訳す